

伊吹町文化財調査報告書 2

杉沢遺跡発掘調査概要報告書

昭和63年 3月

伊吹町教育委員会

杉沢遺跡発掘調査概要報告書

昭和63年3月

伊吹町教育委員会

序 文

伊吹町は、中部地方と湖北・北陸を結ぶ要路に位置し、縄文時代から、私達祖先の生活の舞台として繁栄し、貴重な文化財が数多く残されています。

殊に杉沢遺跡は、明治時代から遺物の発見が相つぎ、多くの土器・石器が出土しています。特に昭和十三年には、京都大学の小林行雄先生らの調査で、二組の合口甕棺が出土し、一躍その名を有名にし、県下でも数少ない縄文時代晩期の遺跡として知られています。

このたび、杉沢地区において、ほ場整備事業が施行されることとなり、それに先立って遺跡の発掘調査を行ないました。町民にとって貴重なこの文化遺産を、永く後世に伝え残すことが私達の重要な使命であることは言うまでもありません。

実施にあたっては、県文化財保護課の指導と地元の方々の御協力も得られ、円滑に調査が進められ、概報をまとめることが出来ました。

この概報が、伊吹町の歴史の解明に大いに役立つことを願うとともに、末筆になりましたが、調査にあたりまして、関係諸機関、関係諸氏のご指導、ご協力を賜りましたことをここにしるし、深く感謝する次第であります。

昭和六十三年三月

伊吹町教育委員会

教育長 伊 富 貴 豊

目 次

序

例言

1. 学史と経緯 1
2. 位置と環境 2
3. 試掘調査 3
4. 発掘調査 5
5. 杉沢遺跡の再評価 13

挿図目次

第1図	位置図	2
第2図	戦前の遺物分布図	3
第3図	調査トレンチ配置図	4
第4図	T.1, T.2 遺構図 (下が T.1)	6
第5図	T.1, BP1 遺構図	8
第6図	出土遺物(1)	9
第7図	出土遺物(2)	10
第8図	出土遺物(3)	11
第9図	出土遺物(4)	

図版目次

図版 1	㊶調査状況	㊶T 1 (北から)
図版 2	㊷調査状況	㊷T 2 (南から)
図版 3	㊸T.1 中心部 (西から)	㊸B. P. 1 (西から)
図版 4	㊹B. P. 1 遺物出土状況(1)	㊹B. P. 1 遺物出土状況(2)
図版 5	出土遺物(1)	
図版 6	出土遺物(2)	
図版 7	出土遺物(3)	
図版 8	出土遺物(4)	
図版 9	㊺出土遺物(5)	㊺出土遺物(6)

挿 図 目 次

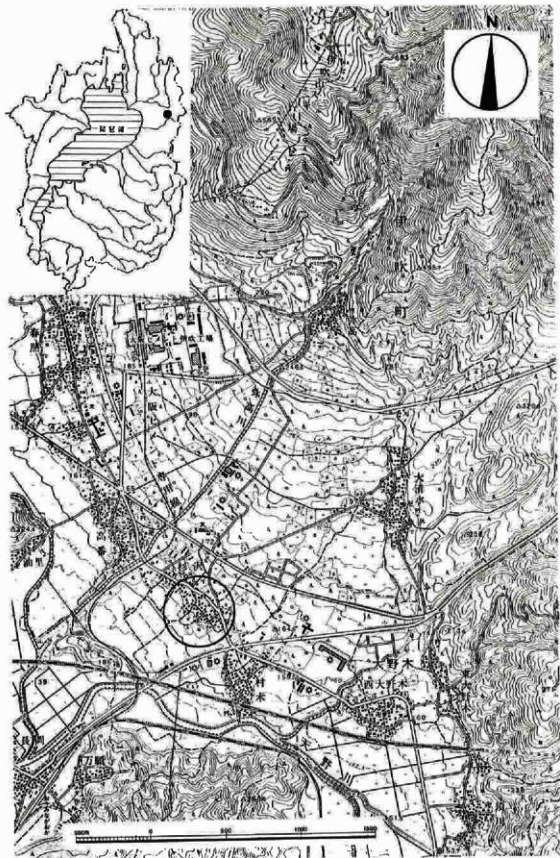
第1図	位置図	
第2図	戦前の遺物分布図	2
第3図	調査トレンチ配置図	3
第4図	T.1, T.2 遺構図 (下が T.1)	4
第5図	T.1, BP1 遺構図	6
第6図	出土遺物(1)	8
第7図	出土遺物(2)	9
第8図	出土遺物(3)	10
第9図	出土遺物(4)	11

図 版 目 次

図版1	㊤調査状況	㊦T.1 (北から)
図版2	㊥調査状況	㊧T.2 (南から)
図版3	㊦T.1 中心部 (西から)	㊨B. P. 1 (西から)
図版4	㊧B. P. 1 遺物出土状況(1)	㊩B. P. 1 遺物出土状況(2)
図版5	出土遺物(1)	
図版6	出土遺物(2)	
図版7	出土遺物(3)	
図版8	出土遺物(4)	
図版9	㊪出土遺物(5)	㊫出土遺物(6)

例 言

1. 本書は伊吹町教育委員会が主体となって実施した、団体當場整備事業に伴う杉沢遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 本調査は伊吹町の依頼により、伊吹町教育委員会が実施した。
3. 調査は伊吹町教育委員会主事の場市樹が担当し、滋賀県教育委員会文化財保護課主任技師用田政晴が指導を行った。
4. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては杉沢工区ほ場整備事業KBM.5 (H=151.878m) を基準としている。
5. 出土遺物は伊吹町教育委員会で保管している。
6. ほ場整備事業に伴う杉沢遺跡全体の発掘調査報告は後日、整理・刊行の予定である。
7. 本概要は用田が担当した。
8. 調査参加者
大沢 寛、森口資三、稻村重一、辻村孝男、高橋芳光、辻村由利子、樋口立夫、
辻村まき、山崎 栄、丸木敏子、堤与市郎、宮崎春藏、樋口照子、大橋五恵
9. 調査協力者
堀内安三郎、伊藤正行、福永武三郎、藤田英男、田中友三、狩野義章、箕浦憲次郎、
山崎仁生、梅原義夫、藤井定治、藤田かつ
10. 調査指導・助言者
泉拓良 (奈良大学)、家根祥多 (立命館大学)、百瀬長秀 (長野県教育委員会)、
西脇対名夫 (京都大学)、川崎保・中川和哉 (同志社大学)、
中司照世 (福井県埋蔵文化財調査センター)、中井 均 (米原町教育委員会)



第1図 位置図

1. 学史と経緯

「滋賀県坂田郡伊吹村杉沢にある縄文時代の遺跡。伊吹山南麓に弥高川の形成した扇状地の末端に位置し、広範囲にわたって晩期縄文式土器や石器類が出土する。昭和13年(1938)小林行雄が勝居神社東方の畑地で合口甕棺2個を発掘した。いずれも口縁外側に凸帯をめぐらした2個の壘形土器で、口をあわせて、ほぼ水平に埋めていた。従来出土の石器には石鏃、磨製石斧、石剣、石刀、多頭石斧、御物石器などがある。」

これは、現在でも考古学徒必携の水野清一・小林行雄『図解考古学辞典』(1959年)の「すぎざわいせき 杉沢遺跡」の項である。

明治以来、杉沢では石器が出土することが知られ、昭和3年には島田貞彦によってその石器類が紹介された⁽¹⁾。ただ、これに伴う土器については、「縄文式系統なるも辛うじて認識するに止まって」おり、その後、柏倉亮吉も縄文土器を弥生土器として図で示したことがあった。⁽²⁾

これらの石器を伴出する土器の時代や性格を確認するため、昭和13年に小林行雄らは、わずか2日間であったが発掘調査を行った。調査の結果、2組の縄文時代晩期後半の甕棺墓を検出し、この甕棺墓はそれ以降、縄文時代の葬法の一つとして、戦後の最も代表的な考古学概説書である『日本考古学概説』にも図入りで掲載されるなど、広く紹介されることとなった。⁽³⁾

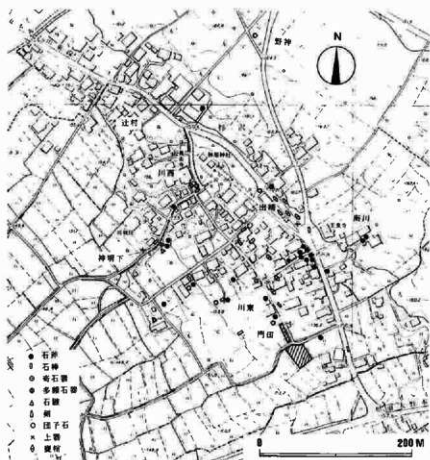
昭和13年の調査報告では、縄文時代晩期後半の甕棺以外に、縄文時代中期か後期前半の土器片が3点示され、いわゆる杉沢遺跡が縄文時代の終り頃だけの遺跡でないことは明らかであったが、著名な遺跡であるにもかかわらず、このことは余り知られずに今日まで至った。

昭和62年度になって、杉沢遺跡周辺でもほ場整備事業が計画されることになった。このため、事前に杉沢遺跡への支障の有無を確認する試験調査を実施し、計画地内での遺跡の範囲を明らかにした上で、その結果に基づき、盛土対応による遺跡保存のための設計変更の協議を行った。そうした経緯をふまえた上で、最終的にしぼられた排水路と切土計画部分について、やむなく最小限の処置としての発掘調査を実施することとなった。

2. 位置と環境

伊吹山(標高1377m)は近江と美濃の国境にそびえる近江一の高峰で、杉沢遺跡はその南麓の弥高川による扇状地の扇端部分に位置する。東約3kmの山際を抜けると美濃国関ヶ原に至り、東国となる。かつて杉沢は、杉の沢とも言い、また桐沢とも書く。その地名は伊吹山麓の樹林地であったことにちなむという。現在は坂田郡伊吹町大字杉沢と言い、かつて、石器類が採集された小字名として、門田、川東、南川、大沢、神明下、出崎などがあげられる(第2図)。

伊吹山南麓の主として扇状地上には、縄文時代集落がかなり知られ、大字名で言うと、



第2図 戦前の遺物分布図 (『改訂近江国坂田郡志』第1巻 挿図を一部加筆・改変)

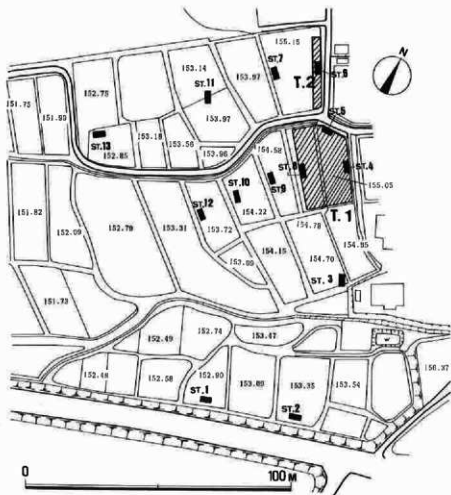
伊吹、上野、高番、大清水、村木で、それぞれ、石器や縄文土器の出土が知られているが、実態は不明といわざるをえない。

また、高番遺跡では硬玉製の勾玉も出土しているという。

3. 試掘調査

試掘調査は現地調査の結果、遺物散布地により近い部分での排水路と切土部分に約2×5mのトレンチを13箇所（S. T. 1～S. T. 13）設定して実施した（第3図）。

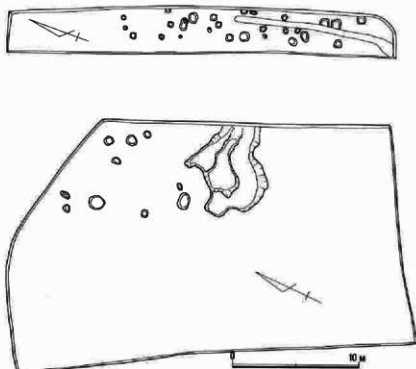
その結果、S. T. 4～S. T. 8までの5箇所においては、約10～15cmの薄い耕上下に灰



第3図 調査トレンチ配置図

褐色ないし茶褐色砂礫土が広がっており、その上面から約5～10cm下げた部分で、縄文土器を主体に検出した。なお、S. T. 7では一部弥生土器と灰軸陶器を混じえていた。S. T. 1～3、9～13においても約10～15cmの耕土下は、5～10cm大の礫を中心とした砂礫土が広がっていたが、遺構・遺物共全く検出されなかった。

この結果をもとに、S. T. 6、S. T. 7を含む田面は、設計変更による遺跡保存の協議を事業者と行い了解を得たが、この北東部辺は排水路計画であったため、発掘調査を実施することになった。一方、S. T. 4、5、8を設けた田面は設計変更が不可能となったため、記録保存のため調査を実施することとなった。以下、前者をT. 2、後者をT. 1と称し、10月から発掘調査を実施した。



第4図 T.1,T.2遺構図(下がT.1)

4. 発掘調査

T. 1の遺構 T. 1は約31×18mの平面台形を呈するトレンチで約10～15cmの耕土を除く除去すると、灰褐色砂礫土(部分的に茶褐色)となる。この層位上面では遺構は検出されず、更に約5～10cm下げると遺構面が明らかとなる。しかしながら、遺構面を形成する土層とその上層の砂礫土は区別し難いもので、礫は3～10cm(場合によっては人頭大の礫も含む)の河原石状の円礫、角礫より成る。

遺構としては、トレンチ北東隅近くで径約20～130cm、深さ約10～50cmを計る10個の土城、および、B. P. 1と称した南北5.8m、東西7.2m以上を計る不定形の浅い土城を検出したのみであった。各土城の埋土は、水分を多く含むほば茶褐色ないし暗褐色砂礫土で、埋土内の分層は不可能であった。

B. P. 1の埋土も同様で、大きく2段の落ち込み状を呈し、底部は舟底状をなす。深さは、最深部で約36cmを計り、自然地形の落ち込みと判断されたが、埋土内からはかなりの縄文土器と土製品、それに石器が一気に廃棄、埋められた状況で検出され、特に土器の遺存状況も良好であった。なお、この大形土城からは縄文土器とそれに伴う石器以外は検出されなかった。

T. 2の遺構 T. 2は幅約3mの道をはさんでT. 1の北西に位置し、南北約31m、東西約3.7mの細長いトレンチである。こども、T. 1と同様に深さ約10～15cmの耕土下に、灰褐色砂礫土が広がり、これを約5cm除去すると遺構が検出された。これはトレンチの南半を中心に広がる径約10～85cm、深さ10～40cmの土城で、都合27個検出した。規則的に方ないし円などに並ぶものはなく、現在までのところ、その性格等はトレンチ幅が狭いこともあって不明である。

土城内埋土はT. 1と同様で、埋土内からは縄文土器の小片がわずかに検出されたが、器形復元にまで至るものはみられなかった。

なお、南端から、北に向って伸びる溝状遺構は、掘り拳大の角礫を充填した暗渠排水であった。

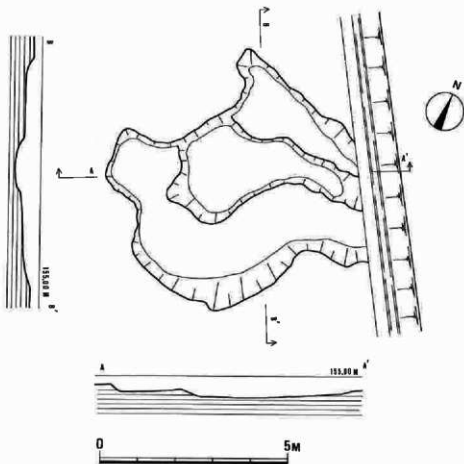
縄文土器と土製品 T. 1、T. 2とも、出土した土器は、全て縄文時代晩期の所産で、特にまとまって出土したB. P. 1内出土器を中心として種類(器種)別に、以下略述する。

深鉢は口縁部下にゆるい段あるいは、口縁部がゆるく内湾して口縁部下の胴部と、その立ち上り角度を異にするものを深鉢A₁～A₃類とした。

深鉢 A₁ (1~10) は、口縁部下に段を備えるもので、口縁部は多くの場合、内外共なで仕上げとなるが、巻貝による外面の条痕が口縁部端までに及んでいるもの(7、8)や、磨いていもの(3)もある。外面は巻貝条痕か、なで仕上げにより、内面も巻貝条痕かなにより調整され、ヘラ削り後になでたものもある(1)。2の穿孔は焼成前によるものと観察される。胎土は全体的に黒雲母や長石を混じえた1~5mm大の砂をかなり含み、灰褐色ないし茶褐色を呈する。

深鉢 A₂ 01は、口縁部外面のヘラ描文様を特徴とする。2本単位の縦線間を12本の横線がめぐる様相をもち、胴部は巻貝条痕後、なでて仕上げる。内面もなでている。

深鉢 A₂ 02は、口縁部外面に巻貝による横方向の沈線文が施され、波状口縁をもつ。沈線



第5図 T.1.BP1遺構図

は口縁端近くに3本が全周するようで、その下位に2本1単位で2単位認められる。

深鉢A₁ 09は波状口縁をもち、横方向の凹線と直交して、巻貝状の凹凸が認められる。胎土は1~2mm大の長石を中心とした砂を含み、淡茶褐色を呈する。

深鉢A₂ 04はへら描沈線による文様が施され、波状口縁の頂部は押しされ、他の口縁端部は平坦面をなす。雲母を多く含む。

深鉢のうち、大きく段をもたずに直口する口縁をもつものや、外反あるいは内湾するものを深鉢B₁~B₂類として扱った。

深鉢B₁ (15~17)は、直口縁部に2本09あるいは3本(15、17)の凹線を施すもので、15の外側は巻貝条痕の上をなでており、17の凹線は明らかに巻貝によるものである。

深鉢B₂ 08としたものは、外面は巻貝調整後なでている。この18は、17・22と共にS、T、8出土品である。

深鉢B₃ (19~22)は、やや外反する口縁をもち、外面はへら削り09、巻貝条痕(20・22)、なで07と様々である。21・22は、口縁端部の一部に折り返し痕が残る。

深鉢B₄ (23・24)は、外面を巻貝で磨くもの04となでるもの04があり、24には粘土紐の継ぎ目が明瞭に残る。

深鉢B₅ 04は完形に近く、内湾気味の直口縁を備える。外面は巻貝による左七りの条痕が認められ、内面上半はへら削り、内面下半はなで仕上げである。

浅鉢はA₁~A₃、B、C、Dに分類した。

浅鉢A₁ 09は口縁を削り出して肥厚し、外面下半はへらで削る。27と30は同一個体と思われ、浅鉢A₂類とした。1~2mm大の砂を含み、暗灰色を呈し、口縁部に刻み目を残す。

浅鉢A₃ 09は内外共削って仕上げたもので、口縁部に段をもつ。

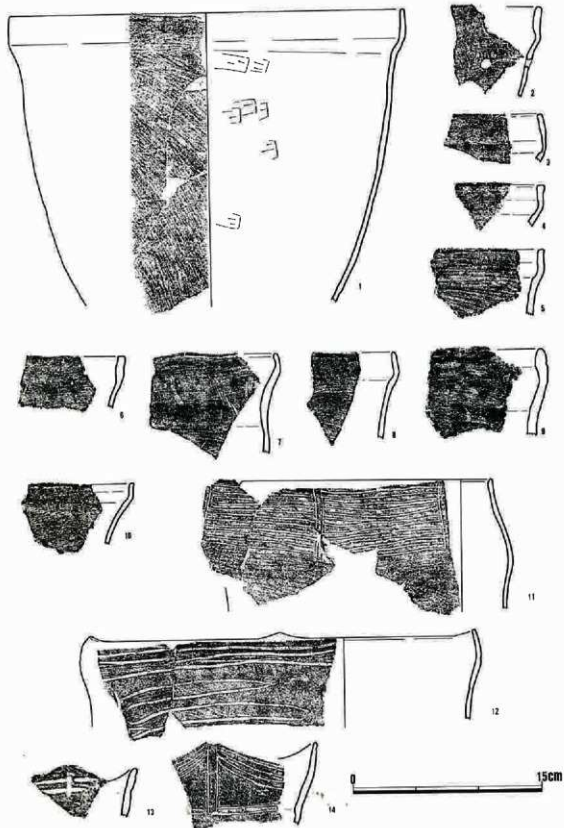
浅鉢B 08も口縁部を削り出して肥厚し、肩部にへら描文様を備える。

浅鉢C 01は外面を研磨した後、襷原式文様を備えるもので、文様より下位はへら削りを施している。

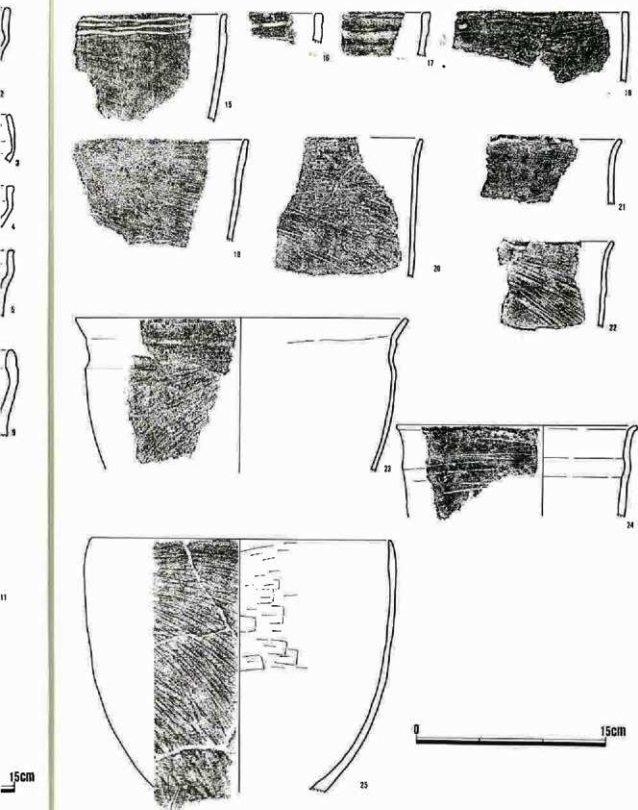
浅鉢D 09は1~2mm大の白っぽい砂をかなり含むもろい灰色の胎土からなり、他と明確に区別される。かなり大形品で口縁部にいわゆる豚鼻といわれる刻み目をもつ2個と1個の突起が1単位ずつ交互に備わる。口縁部の2本の隆帯上に刻み目があり、それらをつなぐブリッジ状の突起も残る。明らかに中部山岳地帯からの搬入品である。

柄はA₁ 08とA₁ 09は同様の口縁部形態を呈するが、文様によって分類した。

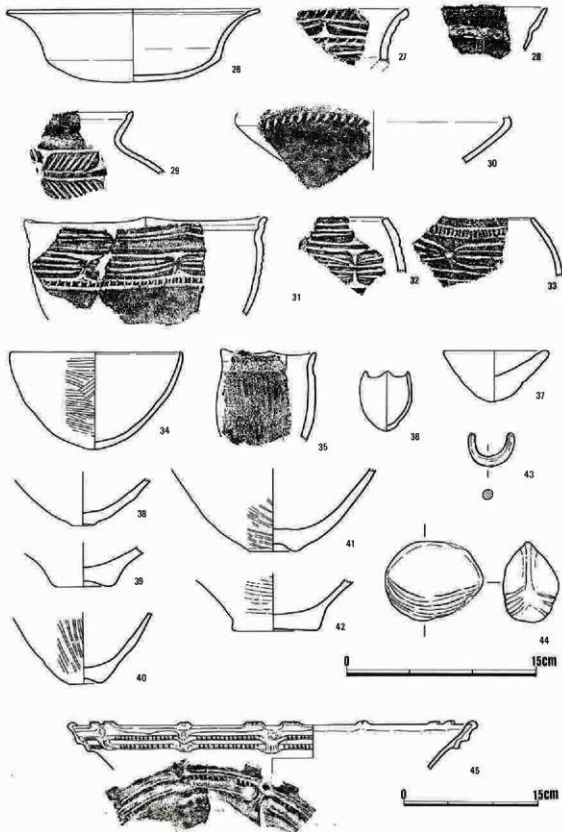
柄Bは外面を巻貝調整後、少しなでているもので、内面はいずれの柄もなで仕上げとな



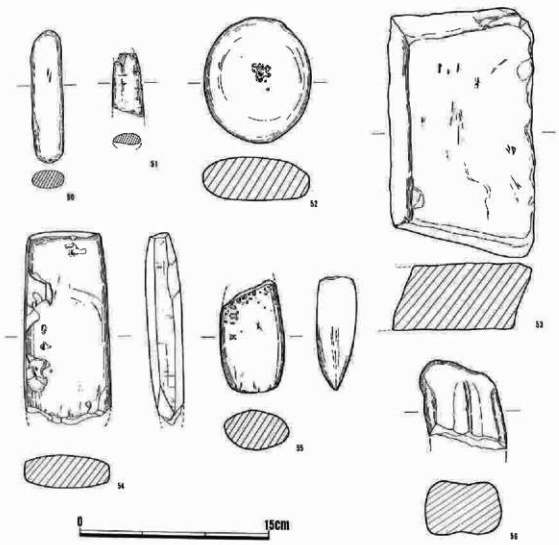
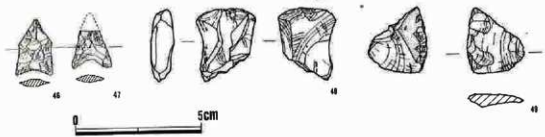
第6図 出土遺物(1)



第7図 出土遺物(2)



第 8 圖 出土遺物(3)



第9圖 出土遺物(4)

る。

他に小形土器ながら、明瞭に波状口縁をもつもの(35、36)などもある。

底部を図示した(38~42)うち、なで仕上げ以外のものはすべて巻貝の調整が残存する。42は平底状を呈するが、やや凹気味である。

43の土製品の両端は完結しており、微砂を含む表面はなで仕上げている用途不明品である。44の石冠状土製品と呼ぶべきものは、2~3mm大の砂をかなり含む荒い土からなり、赤茶褐色を呈する。

石器 53、54はT、2遺構面上出土、他はB、P、1埋土中から出土したものである。

46、47の石鏃は48の楔形石器、49の削器と同じく安山岩製で、肉眼的にはサヌカイトに近い。50は砂岩製敲石の一種で、図の上端に一部磨き痕、下端に叩いた跡が認められる。51の石刀は半截され、両端は欠失する粘板岩系の変成岩である。

52はすり石(敲石)、53は石皿で図の左半は欠失するが、欠失面も結果的には磨かれている。54、55は磨製石斧で、54は先端を失うが、石材は硬玉に似る。55は変成岩かと思われる。56の砥石も下半は欠失し、両面共、砥石として使用する。

他にB、P、1埋土内からは、安山岩製で肉眼的にはサヌカイトに近い剃片・石核が数10点、および石皿、砥石が数点出土するが、下呂産に近い安山岩製剃片も3点認められた。

5. 杉沢遺跡の再評価——とりあえずのまとめにかえて——

従米、縄文土器は良好な一括資料に恵まれることが少かったため、形態・文様等による型式学風組列に基づき型式の設定がなされていることも多かった。

近畿地方の縄文時代晩期前半についても、それまで滋賀里式として1948年の大津市滋賀里遺跡出土資料をもって代表されていたもの⁽⁵⁾が、湖西線建設に伴う調査によって滋賀里Ⅰ～Ⅲ式に細分された⁽⁶⁾が、これとて扇状地間の開析谷の流路中の遺物包含層を層位ごとに型式として設定したものである。従ってこれらは型式学的な検討を加えたものではなく、その後も当該期の良好な一括資料に恵まれなかったため、ほとんど再検討を加えられなまま今日に至っているようである。

今日の調査によって、はからずも同じ近江の中での晩期前半の良好な一括資料が得られた。これは巻貝条痕による調整を施した深鉢が主体をなし、二枚貝条痕は認められないことや、黒色磨研浅鉢や榎原式文様を備えた浅鉢の存在から、滋賀里Ⅱ式並行期ととり合えず言っておくことにするが、深鉢において屈曲の形骸化したものが見られない点とか、口縁立ち上りのある長頸の浅鉢が存在しないのではないかといい見通しから、今後の詳細な検討により、滋賀里Ⅱ式の古相として一型式設定できる可能性が出てきた。

また中部山岳地方（信濃中南部）からの搬入品は、当該地で浅鉢Cの第5段階と第6段階の間に位置するよう⁽⁷⁾で、この地方との時期の並行関係や甲斐～駿河の清水天王山式、あるいは東海地方の寺津式・本刈谷式等との関係の手がかりを得る一つの資料となった。

いずれにしてもこれまで縄文時代後期の一時期と晩期後葉の集落として扱われていた杉沢遺跡が、地点を変えながら晩期の初めでも集落が営まれていたことが明らかになった。

湖北では最近、米原町磯山城遺跡やすぐ近くの彦根市松原内湖遺跡などの湖辺の遺跡でも晩期のまとまった資料が検出されているが、晩期の前半に限って言えば、その土器類は極めて少かった。これらの間を埋める資料がどこにあるはずという予測はあったものの、古くから縄文時代遺跡がかなり知られていた伊吹山麓で今回見つかったことは、今後の詳細な調査の必要性和これらの遺跡の再検討を求めるものとなった。

註

- (1) 島田貞彦「有史以前の近江」『滋賀県史蹟調査報告』第1冊 1928年
- (2) 柏倉亮吉『滋賀県史蹟名勝天然記念物概要』1936年
- (3) 小林行雄ほか「近江坂田郡春照村杉沢遺跡」『考古学』9-5 1938年
- (4) 小林行雄『日本考古学概説』1951年
- (5) 坪井清足「滋賀県大津市滋賀里遺跡」『日本考古学年報』1 1951年
- (6) 丹羽佑一ほか「遺物の検討 A土器」『湖西線関係遺跡発掘調査報告』1973年
- (7) 百瀬長秀「羽状の沈線文をもつ土器の系統と展開」『長野県考古学会誌』49 1984年



調査状況



T1 (北から)



調査状況



T2 (南から)



T 1 中心部 (西から)



B. P 1 (西から)

況

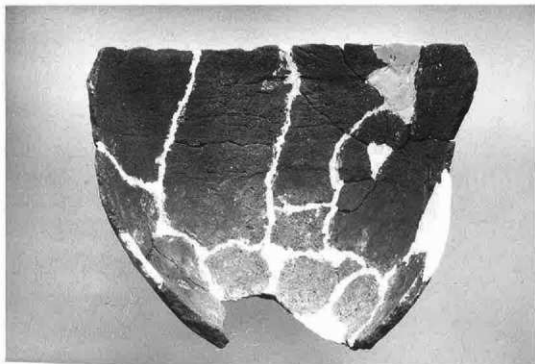
6)



B. P 1 遺物出土状況(1)



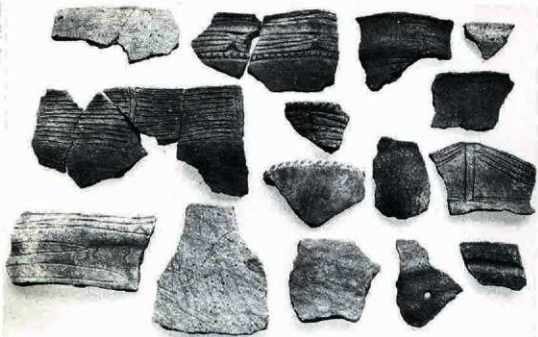
B. P 1 遺物出土状況(2)

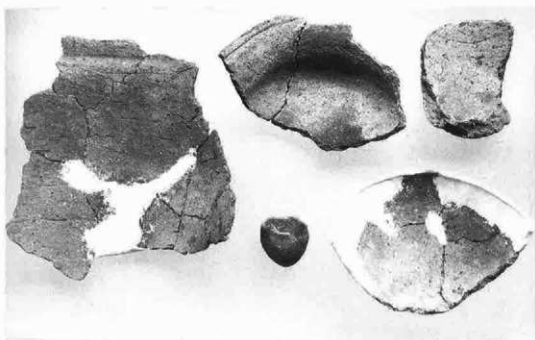
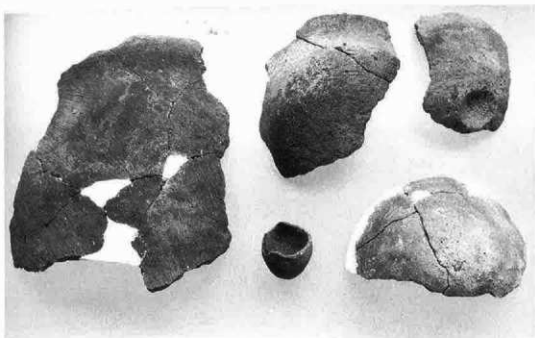


出土遺物(1)

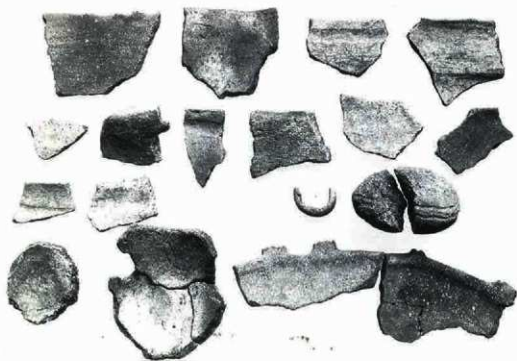
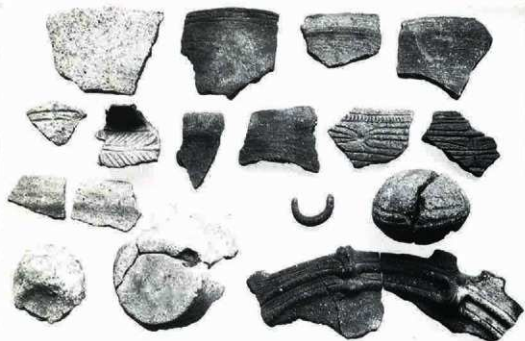
2(1)

2(2)



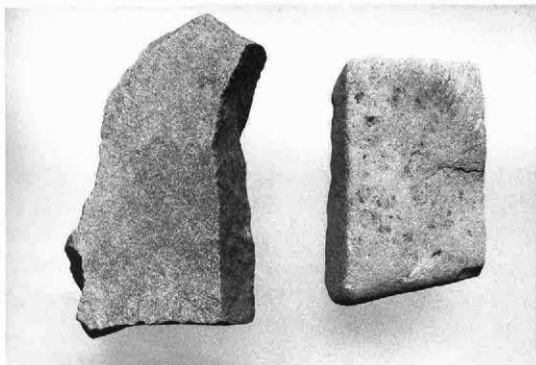


出土遺物(3)





出土遺物(5)



出土遺物(6)

伊吹町文化財調査報告書 2

杉沢遺跡発掘調査概要報告書

昭和63年3月31日 発行

編集・発行 取田郡伊吹町番地491

伊吹町教育委員会

印刷 京都市下京区油小路北寺上ル

有限会社 真陽社

